



第5回 伝説の編集人

新潮ジャーナリズムの萌芽

文 森 功

text by Isao Mori

週刊新潮で文学をやる——。
新潮社内では伝えられてきた齋藤十一の寸言の一つである。出版業界で初の試みとなった週刊新潮の発刊は、新潮社のみならず齋藤にとって壮大な実験だった。齋藤が戦後、文芸出版社の看板雑誌である新潮を復刊させ、出版の歴史にその名を刻んできたのは、誰もが認めている。したがって当初の週刊新潮は日本の大家が連載を飾ることもできた。

しかし、いわばジャーナリズムは門外漢である。そこは新聞社の専売特許であり、出版社が踏み入れる余地はないと思われた。齋藤はそこに挑んだ。のちに週刊新潮の四代目編集長となる松田宏はこう言った。

「うちは新聞社のような取材の情報網がない。だから社内でも、総合週刊誌は無理ではないか、と心

他者を褒めないが、村尾だけは別格のようである。よみうり寸評は編集手帳と並ぶ読売新聞の名物夕刊コラムだ。村尾は河上雄三とともに日曜日版のフロントページを飾る紀行文も書いてきたが、本田はこれを引き継いだ。のちに直木賞作家となる三好徹が河上だ。そのときの心境を以下のように綴っている。

〈村尾さんと三好さんという、たとえるなら飛車角級の書き手に伍して、初めて紀行文を書くことになった端歩程度の私は、縮こまる思いであった。家賃が高すぎるというやつである〉

村尾は一九二二（大正十一）年生まれだから、白寿の手前だ。終戦三年目の四八年に読売新聞に入社し、社会部ひと筋で取材、執筆活動を続けてきた。そんな村尾が新潮社にかかわるようになったのは、同級生の野平との縁からだけではない。齋藤が新米編集者時代に仏文学者の河盛好蔵のもとへ通い、終戦後に新潮の編集顧問に迎え入れたことは前に書いたが、村

配する声が上がっていたんだ。そこで齋藤さんは考えた。当人から直に聞いたところでは、『週刊新潮の創刊にあたり、メディアのいろんな人を集めて討論会をやった』という。そのなかで、村尾清一さんと出会うんだよ。この人は、野平（健一）二代目週刊新潮編集長）さんの旧三校（現京都大学）時代の同級生だった。読売新聞の有名な記者で、その縁故で週刊新潮を手伝うようになった。村尾さんとは今でもときどき話をするけど、『読売でもらう給料より、新潮社のギャラのほうがよかった』というくらい情報提供でお世話になったらしい」

齋藤は従来の強みである人気作家の連載小説のほか、時事問題を扱う特集記事を掲載し、週刊新潮誌面の二本柱に据えようとした。特集記事を想定し、創刊号から「週

尾も河盛とは縁が深い。村尾はこう話した。

「戦後間もなく、僕と野平は東京に住む家がないから、京都三高で同じフランス文学のクラスの先輩だった河盛さんを頼り、家に転がり込んでいたのです。河盛さんの家には、フランス文学の本がいっぱいあるでしょう。そこに齋藤さんも来ていて、河盛さんの蔵書を一生懸命読んでいたんです」

豊饒として若々しくユーモアたっぷりの語り口調だ。不思議な縁でもある。

「実は僕も週刊新潮にかかわる前、小説を書いて文芸誌の新潮に応募したことがあったんです。戦前、パリに長く滞在した松尾邦之助さんから、フランス人のマルセル・ジュグリスが日本にやってくる来たときに紹介され、彼の物語を書いた。『三保の松原』と題し、それがたまたま新潮に入選しました」

松尾は戦前、逋信省の嘱託職員として渡仏し、長らくパリに住んで雑誌「Revue Française

間新潮欄」をつくり、そこに五から六本の政治、経済、社会、などの記事を並べた。読売新聞の村尾は、それを担った。

村尾は一九五四年に起きた第五福竜丸事件をスクープし、「死の灰」という造語を生み出した。読売新聞のスター記者だ。日本エッセイスト・クラブの理事長や会長を歴任している。村尾については、読売の後輩にあたるノンフィクション作家の本田靖春も私淑し、自叙伝「我、拗ね者として生涯を閉ず」のなかで、読売新聞（社会部の大看板）と絶賛している。

〈日本を代表する文章家の一人である。一九六九（昭和四十四）年から十七年間にわたって「よみうり寸評」を担当、いかにも教養人らしい含蓄あるユーモアで、とくにインテリ層に人気があった〉
拗ね者と自称する本田は滅多に

o・Nippone」（日仏評論）を創刊した。日仏の文化交流に努めた人物として知られる。読売新聞の文芸特置員を辻潤から引き継ぎ、のちにパリ支局長になり、藤田嗣治をはじめ、林芙美子や島崎藤村、高浜虚子ら、多くの芸術家や作家と親交があったとされる。村尾はその読売新聞の先輩の伝手でフランス人のジュグリスを知った。風光明媚な静岡県三保の松原に憧れたジュグリスの妻エレヌが、白血病にかかって夭折する。異国の地に遺髪を埋めてほしいと懇願した妻の願いを叶えるため、翌五二年に遺髪を埋めた「エレヌの碑」を建立した。村尾はその実話をもとにジュグリス夫婦の悲恋物語を新潮に投稿し、それが齋藤の目に留まった。齋藤十一は文学の素養のある敏腕記者を週刊新潮に引き入れ、新潮ジャーナリズムを形にしていた。

Profile

福岡県生まれ。新聞社、出版社勤務を経て2003年よりフリーランスのノンフィクション作家に転身。08年、09年2年連続「編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞作品賞」、2018年『悪だくみ』（文藝春秋）が「大宅壮一ノンフィクション賞」受賞。『許永中』『同和と銀行』（講談+a文庫）など著書多数、最新刊は『ならずもの』（講談社）



（敬称略）